

自由学園初等部6年 学びの発表会 「学ぶとは」

大隈 賢

2014年の3学期から、6年生は毎年「駅伝ノート」というものに取り組んでいる。自分でテーマを見つけ、調べた事や自分の書きたいことを自由に書くノートだ。これを始めたきっかけは、自分のしたいことを自分で見つけられるようになってほしかったからである。また、それをグループ(家族)内で順に回していくことで、友達の人柄や、学び方まで分かるという利点もある。このような取り組みをしていたこともあり、授業の中で子どもに学びたいことを自由に学ばせてみたいと感じていた。しかし、日々のカリキュラムに追われる中で、これまでなかなかそうした時間は取れてこなかった。今回、「学びの発表会」を活用し、ようやくその時間を確保することができた。

表題の「学ぶとは(何か)」という問いを始めから投げかけることはせず、子ども自身がまずは思い思いに活動することを最優先にした。結果的に子どもはそれぞれの学びを通して「学ぶってこういうことか」と発見していた。学ぶ楽しさを知った子どもたちが、これからも進んで学ぶ人になってくれることを期待している。

I. はじめに (課題・目的)

「主体性」「児童中心」がどのようにして可能になるのかが課題である。一方で、かつて「這いまわる」と揶揄された自由教育の前轍を踏むようなことがないようにしなくてはならない。「主体性」や「児童中心」を大切にしつつも、子どもにとって意義のある学びにつなげるには、教師がどのように介入していく必要があるのか見極める必要がある。

II. 実践の概要

(1) 指導の重点

「主体性」「児童中心」が実現できるように、iPadの基本的な使用法や検索の仕方、情報の正誤判断の方法等、基礎的な内容を教え、許す限り多くの時間と活動場所を提供した。子ども自身で「何を」「いつ」「どうするか」計画を立て、各自に必要な道具を準備するようにした。

(2) テーマ設定

夏休みの「日本地図のおさらい」で、子ども自身が選んだテーマを中心に「サッカー」「バスケットボール」「温泉」「水族館」「鉄道」「宇宙」「平均寿命」「環境」「犬猫」「忍城」「軍艦」の11グループに分かれた。「環境」「軍艦」は1名であったが、「自分のしたいことを自分で見つける」ということを重視したため、1名で行うことも認めた。

(3) 問の設定

表題の「学ぶとは」は私の考えた表題にすぎない。そもそも「本質的な問いを設定してから学習を始める」ということ自体がどうなのかというのが、私には疑問である。少なくとも大人が設定した本質的っぽい問いに答える形で子どもが誘導されていくのは、「児童中心」「主体性」を反故にしているのではないだろうか。本質的な問いというのは、生きていくの中で必ずと出会い、抱えて生きていくという感覚が私の中にはある。よって、最初に問いを決めることはしなかった。実際、子どもたちは活動していく中で、「どうして魚にとっては迷惑そうな水族館があるのか」「温泉の良さをうまく伝えられないのはどうしてか」「命に終わりがなくてどうなるか」「宇宙に魅力を感じるのはなぜか」「地球を守るにはどうしたら良いか」といった問いに何の前触れもなく出会っていた。「問い」が先にあるのではなく、「活動」が先にあるというのが、私の実感である。

III. 実践の内容

1学期は例年と同じことを実施した。4月から「駅伝ノート」、7月8月に「日本地図のおさらい(夏休み)」を行った。これには、「調べる」こと以上に、自分が何をしたいか見つけられるようになってほしいという願いがある。なお、夏休みの「日本地図のおさらい」では、テーマに関する場所に必ず1つは足を運ぶことにしている。

9月初旬、作成した「日本地図」についての発

表を聞き合い、そこで発表されたテーマも参考に「学びの発表会」でどんなテーマで発表をしたいかを聞き、グループを決めた。

(1) 計画・見学先の決定～9月下旬～

発表に向けて、グループごとに計画と調査方法、見学先とその際の交通手段を決めた。見学は主に休日を利用して実施してもらった。博物館、JAXA相模原キャンパス、水族館、日帰り温泉、大学、神社、またプロバスケット選手の開催するバスケット教室への参加等、ご家庭の協力を得て無事に実施することができた。

(2) 調べ学習と表現方法

書籍、インターネット、新聞、見学を通して調べた。子どもに任せておくと調べてわかったことをまとめるだけで終わってしまうということが多かった。相手に伝わりやすくするために【要約】【敷衍】【抽象化―具体化】といった論理の組み立て方については、多くのグループで指導が必要であった。i-Padの活用については、より良いグループの真似をする形で、子ども同士の学び合いが生じていた。

(3) 発表へ向けての活動

インターネットの使用では本筋から外れて横道に逸れるグループが散見された。私の役割が「見守る」から「見張る」になってしまうこともあった。そこで「見守る」という立場ではなく、仲間の一員になったつもりで子どもの活動の中に積極的に入ることにした。私が知らないことを教えてもらったり、こちらから本を紹介したり、おかしかったところは遠慮なく指摘したりするようにした。子どもに任せるために見守りがちだった



姿勢を、子どもと同じ時間と空間を味わっていく姿勢に変えたことで状況は好転した。心配した子どもたちの主体性も、決して損なわれることはなかった。

11月下旬に中間発表をし、発表当日をイメージするようにした。何を一番伝えたいか、発表する内容と方法を精査した。互いのグループの発表を聞き合い、感想や意見を伝えあうことでお互いの学び合いがあり、見せ方も上達していった。直前にはプレゼンテーションの練習や、スライドの見せ方を繰り返し練習するグループが多かった。

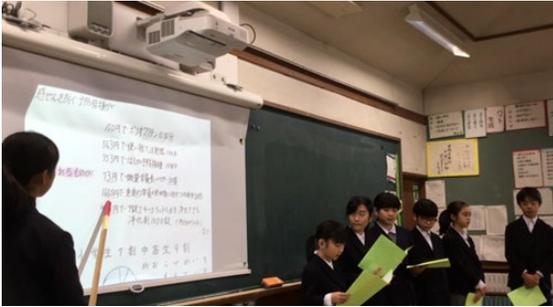
(4) 発表会当日

最終的にすべてのグループが教室で5分程度の発表をした。メンバーが1人のグループは発表を1回、その他のグループは2回とした。また、体育館に駅伝ノート、日本地図のおさらい、これまで調べてきた内容の展示をした。

i-Padを駆使しながら、子どもたちも自信を持って報告していた。

時間	テーマ	発表人数
9:30～	バスケットボール	7
	温泉	4
	水族館	4
9:50～	鉄道	3
	宇宙	3
	平均寿命	7
10:10～	環境	1
	犬猫	2
	忍城	2
10:30～	休憩	
10:40～	軍艦	1
	サッカー	2
	バスケットボール②	7
11:00～	温泉②	4
	水族館②	4
	鉄道②	3
11:20～	犬猫②	2
	宇宙②	3
	平均寿命②	7

当日のプログラム



(5) ふりかえり・児童の変化

発表会終了後、一人一人に発表会の感想と、「学ぶとはどういうことだと思ったか」を書いてもらった。それを学級通信に全員分掲載し、配布した。以下にその一部を紹介する。

【川原田君】学ぶとは、自分の考えを使い、自分の疑問によりそい、解き明かす。そして、終わるとまた新しい疑問が生まれ、それを解く。そうすれば自分が一番知りたいことに気付けると思った。それから、そのために、仲間を作るというのもかなり良いと思う。作れば、また疑問が生まれ、自分が望むより良い物が作れる。

【鴨狩君】学ぶことは楽しいことが分かった。勉強というやらされている感があるが、今回の学びをやって、自分がやる気になると、楽しんでやることができると分かった。グループの中でけんかっぽくなったことがあったが、そのことから、グループで活動するのは一人一人の性格があるからこそ難しいということを実感できた。そのように体で実感するのも学びかなと思った。

【堀尾君】ぼくは学びの発表会を終えて変わったと思いました。学びとは、自分から進んでやることだと思いました。普段の授業も先生にやらされているのではなく、自分のためにやるのだと思いました。けれど、一人ではできない学びもあります。自分は絵を書くことが得意で、もう一人は字を書くことが得意な人や、文章を読むのが得意な人と集まって協力すれば(大きな)完全な○になるのだと思いました。

【林さん】友達と協力して調べたり、個人で調べ

たり、先生から学んだり、学ぶというのは終わりがないと私は考えました。

【大岡さん】協力し合って、一つ一つを組み合わせ、そこで「学ぶ」ということが生まれるのかなと思った。大人になってもそのことが一番大切になってくるのじゃないかなとも思いました。

【内平さん】自由に生きることにつながるんじゃないかと、私は思っています。

IV. 考察

今回の学びの発表会は、6年生にとっては「学ぶとはどういうことか」を考える機会となった一方で、教師にとっては「子どもの主体性がどのよう

に発揮されるか」を考える機会となった。子どもの学ぶ姿を見て感じたことは、「主体性」「児童中心」を大切にするには、一見無駄に思われるような時間が大切だということだ。また、どこまで子どもに委ねて良いかという「塩梅」は、教師とその子どもとの距離感、お互いの性質、場所、タイミングなど、その場限りの様々な変数が関わっている。教師は方法論や経験を踏まえつつも、最終的には直感を頼りに接していかなざるを得ないということも分かった。「こうすればこうなる」という方法論は、時に邪魔になることすらある。教師は子どもをよく見て、関わりを楽しみ、時間と場所を共有している—共に今を生きている—ことに喜びを感じていくことが大切である。再現できない子どもの一瞬一瞬の変化のありようは静的なものではなく、動的な芸術そのもので、それを大人が味わえているとき、子どももまた主体性を発揮するようである。

V. おわりに

子どもの頃に親から言われた言葉が、大人になって自分の心に響くように、何を学んだかというのは、随分後になってから遅れて発見されるものである。学びの発表を終えた時点で子どもが学んだと思っていることは、まだ学びの一部でしかない。何かの折に、今回の学習の意味が、より深いものとして子どもたちの中に見出されることがあれば望外の喜びであるし、深い学びとはそのようなのだと私は考えている。

ところで、school(学校)の語源がギリシャ語

の schore（暇）から来ているように、学ぶという行為において余暇的な時間や行動が重要であることは、今回子どもたちの活動を見ていてよく分かった。考察にも記した通り、「主体性」「児童中心」を大切にしたいなら、効率性や成功を目指すのではなく、多くの無駄や失敗を受け入れ、味わう姿勢が必要である。遊びの中に多くの学びがあるという大人側の心得と忍耐の中でこそ、子どもの主体性は発揮されるのだと思う。

ところで、皮肉にも「主体」とは英語で「subject(従属する・臣下・家来…)」である。今回、「学びの発表会」をするかしないかは教師が決めている。子どもはその枠の中で、学んだに過ぎない。「やることになっているからやった」とも言える。学校教育とは本来そのようなものだとされてしまえばそれまでだが、多かれ少なかれ「枠にはめられている」ことの自覚と「枠の中で自分を輝かせている」という感覚は子どもに持ってほしい。そして、時には枠そのものに疑問を投げかけられる人にもなってもらいたい。

小学生のうちにとここまで考える事はないのかもしれないが、これから先、枠の中で輝くことと枠の外に出ようとする事、その両者の間で揺らぎつつ自分の行動を選択できるひとになってくれることを願っている。

